

博士学位論文審査要旨

2022年1月11日

論文題目： アクイレイア教会会議の研究

学位申請者： 戸根 裕士

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 同志社大学 名誉教授 水谷 誠

副査： 奈良大学大学院 文学研究科 教授 足立 広明

要 旨：

西暦 381 年に西方のキリスト教会によって開催されたアクイレイア教会会議は、従来、ローマ帝国においてアレイオス派が一掃されキリスト教が国教となっていく過程の端緒と考えられてきた。しかし、その見解には、1793 年に発見され、1899 年に全体が判読できるようになった資料「アレイオス派欄外註」の証言が十分に反映されていない。本論文の目的は、4 世紀の教義史研究やローマ帝国史研究の近年の成果を踏まえつつ、「アレイオス派欄外註」の証言を精査して、多角的な観点からアクイレイア教会会議の実態に迫ることである。

一章では、アクイレイア教会会議とローマ帝国の関係に目が向けられる。アクイレイア教会会議が開催された 381 年は、帝国がキリスト教の各派を整理したうえでキリスト教を公認し、帝国全体の秩序を安定させようとした時期に当たっている。こうした政策転換の動向に則して、西方のアクイレイア教会会議においては、東方にならい、キリスト教内での類別と統一化が図られたのである。ミラノの司教アンブロシウスは、このような教会会議の大局的な関心を好機と捉え、都市ミラノで直面する教会情勢を転換させるために、この教会会議を利用したと考えられる。

二章では、4 世紀の教義史におけるアクイレイア教会会議の役割と実態が考察される。教会会議の参加者は皇帝を味方につけ、会議の決議に勅法としての効果を付与することを願っていた。一般にアクイレイア教会会議は西方のキリスト教会における「新ニカエア主義」の受容に貢献したと考えられているが、本論文ではそれについて疑義が表せられる。

三章では、アクイレイア教会会議と「新ニカエア主義」の関係が論じられる。複数の資料から、アクイレイア教会会議は、ラテン語圏に「新ニカエア主義」が浸透する契機にはならなかったことが判明する。また、議事録に記されている議論は必ずしも新しいものではなく、「新ニカエア主義」に分類することはできない。議事録に付された「アレイオス派欄外註」に記載される教説（＝「シルミウムの冒洗」）はラテン語圏の「新ニカエア主義」に分類できるが、その教説の出自は不明確なので、その文献学的な解明を四章と五章の課題とする。

四章では、「シルミウムの冒洗」が言及されている文脈を確認するために「アレイオス派欄外註」の構造の分析が行われる。続く先行研究の検討では、「シルミウムの冒洗」は 378 年のシルミウム教会会議で採択されたローマ司教ダマススが主唱した教義であるとする通説に対し、N. マクリンは文献学的な分析によりその通説を否定し、「シルミウムの冒洗」の実態はアンブロシウス著『信仰について』であるとしたことが紹介される。しかし、マクリンの学説も決定的ではないと説明される。

五章ではアンブロシウス主導のアクイレイア教会会議と「シルミウムの冒洗」の関係が文献の緻密な分析によって検討される。本章は、会議を主導したアンブロシウスのダマススとの関係や

論敵パラディウスとの確執を浮き彫りにしながら、とりわけ、アンブロシウスが「シルミウムの冒洗」を認定した文脈で、それまでの大方の議論を想定してきた論敵パラディウスが驚いたことに着目し、その驚きを分析することによって、「シルミウムの冒洗」の正体を読み解いていく。その結果、「シルミウムの冒洗」とはアクイレイア教会会議以前に、アンブロシウス一派とほとんど関係なく作成された教説であることが判明する。

以上によって、ラテン語圏の「新ニカエア主義」に分類される「シルミウムの冒洗」を引き合いに出して、アクイレイア教会会議が「新ニカエア主義」の浸透に貢献したと主張することは困難であると結論される。

本論文は、教会史・教義史において論じられることの少ないアクイレイア教会会議を取り上げ、いまだ十分な研究の手の及ばない「アレオス派欄外註」を綿密に分析するという手堅い手法によって、通説や先行研究に疑義を呈し、多角的な視点からアクイレイア教会会議の実態を明らかにしている。その視点は独創的であり、本論文は4世紀の教会史・教義史の分野に重要な問題提起をおこした論考として高く評価することができる。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2022年1月11日

論文題目： アクイレイア教会会議の研究

学位申請者： 戸根 裕士

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 同志社大学 名誉教授 水谷 誠

副査： 奈良大学大学院 文学研究科 教授 足立 広明

要 旨：

戸根裕士氏は、2013年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了、同年4月、後期課程に入学し、2021年3月に後期課程を退学したのち、同年9月に学位論文を提出した。2021年12月22日午後3時より、神学研究科は戸根氏に対して約2時間の総合試験を実施し、氏からアクイレイア教会会議に関する十分な素養を背景にした的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のための英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： アクイレイア教会会議の研究

氏名： 戸根 裕士

要旨：

アクイレイア教会会議は西暦381年に西方で開催された。教会会議の内容に関しては、ミラノ司教アンブロシウスが皇帝グラティアヌスを説得して参加者を限定させ、議事においては「アレオスの手紙」を持ち出して、以前から論敵であったラティアリア司教のパラディウスたちに意見を求め、満足出来る返答が得られないと彼らの司教位の剥奪を宣言したと紹介される。故に従来、アクイレイア教会会議は同年に東方で開催されたコンスタンティノポリス教会会議と並んで位置付けられ、アレオス派を一掃する契機と見做され、ローマ帝国においてキリスト教が唯一の国教となっていく過程の端緒と考えられてきた。しかしこうしたアクイレイア教会会議に関する情報は、アンブロシウスの手紙又はアンブロシウス側の議事録の記録などから得られるものであり、西暦1793年に発見され、西暦1899年に全体が判読できるようになった新資料「アレオス派欄外註」の証言が評価に十分に反映されてはいなかった。「アレオス派欄外註」には司教位の剥奪を告げられたパラディウスの意見が記されており、パラディウスの証言は教会会議の正当性を疑問視する観点を提供しているため、アンブロシウス側の情報にのみ依拠してきた従来の評価の再考を促すものである。アンブロシウス側の資料に加え、「アレオス派欄外註」の内容も吟味することで、多角的な観点からアクイレイア教会会議の実態に迫ることができるようになった。

ただし「アレオス派欄外註」は、これまで顧みられなかったアクイレイア教会会議の少数派の証言として貴重なものであるが、その証言全てを真実と見做し、会議の存在意義を否定してしまうことには慎重になるべきであり、より大局的に、アクイレイア教会会議が開催される必要性があったローマ帝国の政治情勢に視点を向ける必要がある。その他にも、これまでアクイレイア教会会議の教義史的位置付けは、「正統派とアレオス派の対立」という図式で評価されてきたが、二十世紀以降に教義史研究が進展し、教義が成立した社会的また政治的背景に関心が寄せられ、更に対立する相手側の見解も考慮された立体的な記述が試みられるようになった。そこでこうした最新の研究状況を踏まえて本博士論文は、四世紀の教義史研究やローマ帝国研究についての近年の成果を踏まえつつ、「アレオス派欄外註」の証言を精査し、アクイレイア教会会議を大局的な観点から位置付けることを課題とする。

一章ではアクイレイア教会会議とローマ帝国の関係を説明した。四世紀におけるキリスト教とローマ帝国との関係を俯瞰すると、西暦381年に開催されたアクイレイア教会会議は、西暦362年から続く異教徒擁護のローマ帝国の方針を転換し、キリスト教のみ公認する政策に転換する出発点の時期にあたった。それと同時に、嘗てローマ帝国内で迫害されていた事実も考慮すると、こうしたローマ帝国の西暦381年からの政策転換は決定的な変化と考えられる。そして政策転換の際に要点となるのは、どのキリスト教の種類が帝国公認の対象として適切かという点を整理することであった。こうした政策転換の動向に則して、西暦381年に開催された東方の教会会議は、色々な教義的見解に分かれているキリスト教内での類別と統一化が図られていて、西方のアクイレイア教会会議もその例に漏れなかった。特に西暦381年1月に発布された勅法におけるキリスト教の類別の観点が意識され、帝国全体の宗教政策の統一が図られた。背景には、

西暦378年からの異民族の侵攻などの混乱の中で帝国全体の秩序を安定させようとした狙いがあった。こうしたアクイレシア教会会議における大局的な関心を好機と捉えたのはアンブロシウスであり、都市ミラノで直面する教会情勢を転換させるためにアクイレシア教会会議を利用した。けれどもアンブロシウスはこの好機を捉え損ね、教会会議以後でもパラディウスたちは影響力を持ち、教会会議の実効性は疑問視され形式の不備は指摘できる。ただ議事録を意図的に作成し頒布させたことで五世紀に至ってパラディウスたち一派が劣勢になる一因となった。

二章ではアクイレシア教会会議と四世紀の教義史の説明をした。四世紀における教会会議の役割と実態を参照すると、アクイレシア教会会議もその例に漏れず、参加者は皇帝を味方につけることに関心があり、教会会議の決議に勅法の法的な効果を付与することを重視していた。四世紀の教義史全体を振り返れば、アクイレシア教会会議は、西方における「新ニカエア主義」の受容の文脈で語られ、「新ニカエア主義」の受容に貢献したと考えられていた。「新ニカエア主義」とはギリシャ語圏に由来し、一般的には、三つのヒュポスタシスと神の唯一性を矛盾なく両立させたニカエア信条の新しい解釈である。西方のラテン語圏では西暦370年代半ば以降、特有の「新ニカエア主義」のあり方が存在し、アクイレシア教会会議は年代的にその潮流に含まれる時期に開催されているので、四世紀の教義史における巨視的な評価はラテン語圏の「新ニカエア主義」の動向を見れば良いことが分かる。

三章ではアクイレシア教会会議と「新ニカエア主義」の関係について論じた。まずアクイレシア教会会議の一次資料を取り扱う上での注意点とその限界を整理する。そして「新ニカエア主義」との関係を探って、まず、アクイレシア教会会議で宣言した司教位の剥奪が「新ニカエア主義」の受容に貢献したのかという点を検討した。その結果、複数の資料から司教位の剥奪が実現したとは思えない証言を発見し、アクイレシア教会会議以後もパラディウスたちは所属都市近辺で信徒を、「新ニカエア主義」と対立する見解で感化することが出来て、更に教会会議の開催や勅法の発布の為に皇帝に働きかけることも出来る状態が続いていたことが判明した。それ故にアクイレシア教会会議は、ラテン語圏に「新ニカエア主義」がそれ以上浸透する契機にならなかったのである。他にも「新ニカエア主義」との関係を探るために、議事録内の議論が「新ニカエア主義」に分類出来るのかという点を論じたが、教会会議内の議論が反動的で後退的と判明したので、「新ニカエア主義」に分類できる可能性はないことが分かった。次は議事録内の議論ではなく、近年発見された「アレオス派欄外註」にのみ記載される教説(=「シルミウムの冒涇」)を取り上げ、ラテン語圏の「新ニカエア主義」に分類できると論じた。けれども、誰が、いつ、どのような理由で「シルミウムの冒涇」という教説を主張したのか不明確なので、「シルミウムの冒涇」の文献学的な解明を四章と五章の課題とした。

四章ではアクイレシア教会会議と「シルミウムの冒涇」の関係に関する論点と先行研究を案内した。「シルミウムの冒涇」が言及される文脈を確認するため「アレオス派欄外註」の構造の分析を行った。続いて「シルミウムの冒涇」とは、ダマススに関する教義を西暦378年のシルミウム教会会議で採択した見解であるという通説を紹介した。しかしマクリンはそのように判断する資料の少なさや文脈の複雑さ、更に「シルミウムの冒涇」を言い換えた表現の語彙論的分析により、その通説を否定し、幾つかの典拠を挙げて「シルミウムの冒涇」の実態は、アンブロシウス著の『信仰について』であると論じた。その後マクリンの学説が通説となったが、マクリンの学説に残存する問題点を個々に取り上げ、マクリンの学説でさえ決定的ではないと説明した。

五章ではアクイレシア教会会議と「シルミウムの冒涇」の関係を新しい分析方法から検討する。そのために「シルミウムの冒涇」を含む文脈で、大方議論の内容を想定して来たパラディウスが驚くという反応を見せたことに着目し、どのような状況なら驚き、どのような想定なら驚かないかを分析し、驚かざるを得ない「シルミウムの冒涇」の正体が何かを読み解いた。結果、「シルミウムの冒涇」とはアクイレシア教会会議以前に、しかもアンブロシウスたちと殆ど関係なく作成された教説であると判明した。それ故に、ラテン語圏の「新ニカエア主義」に分類される「シル

ミウムの冒瀆」を持ち出して、アクイレイア教会会議の教義史的な意義を論じることは難しい。

結論にて、パラディウスたちの司教位の剥奪が実現したのか否かという観点や、教会会議内の教義に関する主張の傾向を分析した結果、四世紀の教義学の通史で確認したような、アクイレイア教会会議がラテン語圏の「新ニカエア主義」の受容に貢献したという先行研究の評価は訂正する必要がある点を指摘する。教会会議の開催に至る経緯を踏まえるとアクイレイア教会会議は、ローマ帝国全土のキリスト教の類別化と統制に関係していたので、西方のラテン語圏では宗教政策と教義に関する議論の成熟との間に隔たりがあり、東方の状況と比べると対照的であった。またアクイレイア教会会議はその実効性が疑問視されるが、議事録を戦略的に残して頒布させたことにより、その後のパラディウスを含めたアレイオス派と見做される者たちの信仰の保持を困難にする一因になった。